

## 「隆房」というイメージ

——「平家公達草紙」と「隆房卿艶詞絵巻」——

小林 加代子

一、「平家公達草紙」と「隆房卿艶詞絵巻」

藤原隆房は、『平家物語』巻六「小督」に登場することでよく知られる人物である。この隆房を描いた絵巻が現在に伝わる。「平家公達草紙」と「隆房卿艶詞絵巻」である。これらはいずれも、白描物語絵に分類される。

白描絵とは、墨のみで描かれ、彩色が施されないものの総称である。白描物語絵は、その中でも特に、一三世紀中頃から一四世紀にかけて流行した、やまと絵系の物語絵を指して言うものとされている。「平家公達草紙」「隆房卿艶詞絵巻」の他に、白描物語絵の代表的作品とされるものには、次のようなものがある。「白描源氏物語絵」「枕草子絵巻」「豊明絵草子」「尹大納言絵巻」などである。

白描物語絵に描かれる世界とは、既に多数指摘があるように、い

わゆる王朝的雰囲気に満ちている。しかも、こうした作品は、例えば「枕草子絵巻」について見ると、その箱書が「詞後光厳院、絵女筆」とされ、『看聞御記』永享一〇年（一四二八）二月三日条に「抑自室町殿御絵二巻絵、此詞伏見院宸筆云々、実否御不審定可存知歟、見て可申之由。女中より内々承。清少納言枕双子絵也、墨絵也、殊勝也、宸筆雖相似不分明、慥御筆と八不存、源中納言同前申、若秋原殿進子内親王御筆歟、絵も同前歟、其も不分明之間、宸筆と八慥不拝見之由御返事申、御絵廳返進了。」<sup>①</sup>という記事にも明確に示されるように、非常に高貴な人々、殊に女性の関与があると言われている。

白描物語絵に描かれる題材は、『枕草子』、『源氏物語』、『明月記』貞永二年（一一三三）三月廿日条に「更級墨絵」とあるように「更級日記」などの有名な平安時代の古典と、「平家公達草紙」「隆房卿

艶詞絵巻」「豊明絵草子」などの、平安末期以降、鎌倉時代の制作と考えられ、長く出典不明とされていた、あるいは現在も不明の作品とがある。こうした出典不明の作品群については、出典の追究と同時に、絵巻のために詞書を制作したことも論じられている。<sup>③</sup>

「平家公達草紙」「隆房卿艶詞絵巻」は、いずれも隆房との関連が重視されるが、制作年代と享受層がかなり限定されると見られる白描物語絵に描かれる、ということも注目される。

隆房が生きていた時代からおよそ百年の後に、彼は、イメージとしての「隆房」として白描物語絵に描かれる対象となった。「平家公達草紙」「隆房卿艶詞絵巻」の詞書、及びこれらの制作の場に近いと思われる史料の断片から、白描物語絵の享受者たちにとって、「隆房」というイメージとはどのようなものであったのか、検討したい。

## 二、「平家公達草紙」の「隆房」

現在「平家公達草紙」と名称されるものは、三種類ある。それぞれ福岡市立美術館松永コレクション・東京国立博物館・宮内庁書陵部（以下、それぞれ松永本・博物館本・書陵部本と略称する。）に所蔵され、いずれも、絵巻の詞書という形態で伝わる。<sup>④</sup>

これらの三種の伝本は、平家の公達を描いている点、隆房との関

「隆房」というイメージ

わりが深い点から、もともとは、一連の作品であった可能性が論じられてきた。<sup>⑤</sup>現在、これらの三種を「平家公達草紙」と総称するのは、そうした研究史によるものである。これに対して兵藤裕己氏は次のように述べている。

従来の研究では、現存の三種伝本の関係について、それらが原『平家公達草紙』の、それぞれ別の巻を伝えるという前提で話を進めている。しかし、その前提にしても、必ずしも確証されているとはいえない。とくに伝本間の甚だしい文体的相違にしても、あるいはまったく相互無関係に、別個に成立した作品だったと考えるのが自然なのではないか。<sup>⑥</sup>

この、いわゆる「平家公達草紙」において、隆房との関連は、その成立を論じる上で重視されてきた。絵巻という形態で伝わるものではあるが、その詞章が、絵巻に先行して成立していた可能性は、紹介当初から、ほぼ、前提条件として指摘されている。<sup>⑦</sup>そしてその作者が、藤原隆房その人ではなかったかと議論されてきた経緯がある。<sup>⑧</sup>

兵藤氏は、この隆房作者説に対しても、次のように述べる。

『平家公達草紙』にみえる隆房の直接見聞の語り口にしても、むしろ仮構・仮託と考えるのが自然ではあるまいか。<sup>⑨</sup>

隆房は、松永本・博物館本・書陵部本全てに登場する。そして、

松永本・書陵部本では語り手であり、松永本の第二段は隆房自身の著作『安元御賀記』の抄出でもある。

博物館本では、隆房は語り手ではない。登場するのは、全六段中二段のみで、いずれも管絃の遊びの参加者としてである。主要人物として登場するのは、第六段のみと言ってよい。博物館本第六段を引く。

高倉院の御時、大宮宰相中将実宗、左宰相中将実家、中将泰通、隆房、維盛、弟の資盛、源少将雅賢など、常に打ち連れて遊ぶ人々なりけり。

(略) 月も花もさかりなる夜、例のこの人々、皆具して遊びけるに、(略) 大宮宰相中将、琵琶弾き、少将資盛、箏、泰通、維盛、笛、隆房、笙の笛吹きあはせて、常よりもおもしるきに、ふけはてて、暁方になる程に、隆房、維盛、雅賢など、朗詠、催馬楽、今様、とりぐに歌ひて、明るるなごりををしみつゝ、こよひはことに思ひ出あるまじういひあはせて、「此中にたれ先立ちてしのばれんずらん」など申しけるを、(略) 時の花と見えし維盛おとゝい、はかなくなりければ、此人々いひいでて、いみじくあはれがりけり。(略) (一七九頁)

忘れ難き月花の下での遊びが話題であるが、一貫して隆房と維盛のみ官位表記がない。特殊な位置づけではあるが、隆房との関連は、

他の二本よりは希薄である。

書陵部本は、隆房の視点を通して展開するが、一段として完結したものがなく、絵もない。現存の形態は、絵巻の詞書と推定されているが、白描物語絵という形態では伝わっていない。内容は、三本中最も物語的である。

松永本は、先述のように隆房が語り手であり、第一段が『安元御賀記』の抄出である。隆房との関わりは、最も緊密である。本稿は、隆房との関連から、「平家公達草紙」としては、主に松永本について検討を加えたい。

近年、この松永本第一段と、『安元御賀記』諸本との比較検討から、松永本については、制作年代が下ることが指摘され、作者も、隆房ではない、という見解が強まっている。<sup>①</sup>

「平家公達草紙」の成立事情は明らかではない。三種の伝本がそもそも一つのものであったのか、また、その詞章が、絵巻化される以前に、文字のみで書かれた作品として存在していたのか、未詳である。詞章が絵巻に先行することは、「平家公達草紙」が紹介された段階で、前提として示され、踏襲されたものだが、翻つて、絵巻の詞書として成立した可能性が完全にはないわけではないとも考えられるのである。

ただこれらが白描物語絵という形態を伝えているということは、

ある特定の時期に「隆房」というイメージを享受した状況があること、そこにおける「隆房」とは、藤原隆房という実在とは乖離した、イメージとして造形されたものであることを示している。

松永本の冒頭は、次のように始まる。

御賀の目出たさはさらにもあらずや。又、内々の御遊び、はかなかりしことにつけても、をかしくおぼえしこともこそ、忘れがたく侍れ。いまだ中少將に侍りし時も、同じ若き人、とて、あながちにむつび侍らず、ちとむつまじきゆ糸の侍りしによりて、故西八条入道おほきおほいまうち君の一家の人、にこそ、はかなきたはぶれなどするをりも侍りしか。

(第一段、一六三頁。傍線引用者。)

松永本は、昔を振り返りつつ自己紹介をする「隆房」の言に始まる。そして、彼の視点から、内裏近くでの火災に際して右大将重盛が立派だった事(第一段)、安元二年後白河院五十賀の折に権亮少将維盛の舞った青海波が素晴らしかった事(第二段)、雨夜のつれづれに盗人の真似をして女房たちを驚かしてやるうと提案する左馬頭重衡のユーモア(第三段)、夕暮れの重盛の小松邸で蹴鞠に興じる一家の公達の姿(第四段)などを描き出す。

登場人物や、話題の雰囲気、『建礼門院右京大夫集』と類似することは、早く指摘されてきたことであり、最も手近な「平家公達草

「隆房」というイメージ

紙」の翻刻は、岩波文庫『建礼門院右京大夫集』に付録として収載されている。

『建礼門院右京大夫集』との類似も、この絵巻に描かれた話題が、いわゆる平家文化そのものの産物であると思なされる根拠の一つである。各話題の原拠は、平家文化周辺に語られたものであったものかもしれない。ただ、これらの話題は、平家文化の時代から百年の年月を隔てた人々によって鑑賞され、その語り手という役割を担うのが「隆房」であるということは、一面で考慮される。

「平家公達草紙」特に松永本において「隆房」という語り手は、いわゆる平家文化の色彩を百年後に蘇らせる案内者であると考えられるのである。

### 三、「隆房卿艶詞絵巻」の「隆房」

「隆房」は、白描物語絵の享受層の愛好を得ていたイメージの一つであったと見られる。その「隆房」とはどのようなイメージであったのか、「隆房卿艶詞絵巻」<sup>⑪</sup>を手がかりに、検討したい。

「隆房卿艶詞絵巻」の詞書は、隆房の私家集『隆房集』の諸本のうち、「艶詞系」と呼ばれる系統のみが有する長歌と短歌一首、それに、絵巻独自の短歌一首である。

『隆房集』は、「ひとかたならず所せき人」(九四頁)と、「人目を

包む仲」(九二頁)にある男が、ついには会うこともできなくなってしまうという報われない恋の経緯を詠んだ歌集である。その諸本は、『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四年)「隆房集」項(久保田淳氏)によると、大別して三種に分類され、御所本系・定家本系・艶詞系と名称されている。定家本系は、御所本系の省略本文であるとされる。内容についての研究は、専ら御所本系と艶詞系を対象として行なわれている。『日本古典文学大辞典』によって、これら二系統の大略を箇条書きにする。

御所本系—総歌数一〇〇首。各歌にかなり詳細、具体的な詞書を伴う。『桂宮叢書』に収められた書陵部本など。「隆房集」「四条大納言隆房集」などと題されるもの。

艶詞系—総歌数八〇首。「艶詞」「隆房の恋尽くし」などの題がある。上記二系統に見い出される歌二十三首を欠き、代わり「両系統にない長歌一首、短歌二首を含む」。

本稿では、特に、御所本系を『隆房集』、艶詞系を『艶詞』と表記する。

久保田氏は、また、その性格についてそれぞれ次のように指摘している。

『隆房集』については、以下のように述べる。

(略) その呼称や、和歌を高く、詞書を低く書いている書写形

式などから、この作品は歌集、隆房の家集として受容されたらしいことが想像される。

『艶詞』については、以下のように述べる。

『扶桑拾葉集』や『群書類従』雑部に収められていること、地の文よりも下げて和歌を記しているという書きかたなどから、この作品は物語ないしは日記のような意識で受容されていたことが想像される。<sup>15)</sup>

これらの先後関係については、『隆房集』が先行、『艶詞』が後出であるとされている。久保田氏は、「恋物語としては未整理なのが、御所本系。物語化の進んでいるものが艶詞系」と述べる。また、谷知子氏は、「艶詞は、恋の物語として純化され、色好みの男として造形される」と指摘する。私家集『隆房集』は、『艶詞』において「恋」を主題とする「物語」に改変された、ということになる。

先述のとおり、「隆房卿艶詞絵巻」の詞書は、『艶詞』にしかない長歌を主としている。この長歌が、『艶詞』本文とどう関わるかについて、『日本絵巻大成10』の久保田氏の論を引く。

長歌はすべてではないにせよ、『艶詞』の各部分と照応しているのである。『艶詞』の別名は「隆房の恋つくし」であったが、絵詞の長歌にも恋の諸相は尽くされているのである。

(一四三頁)

『隆房艶詞絵巻』の詞書は、「恋物語」の性格を有する『艶詞』の世界を、そのみで伝達できる内容であったと見られる。

ところで、『千載和歌集』以降の勅撰和歌集には、隆房の歌が三四首入集している。その歌番号を次に示す。勅撰集の歌・歌番号及びその書誌情報は、以下全て、『新編国歌大観 第一巻』（角川書店、一九八三年）によった。

『千載和歌集』（後白河院↓俊成）一一、五三四、六九五、八二七、九三三

『新古今和歌集』（後鳥羽院↓定家他）七四二、一一〇五

『新勅撰和歌集』（後堀河天皇↓定家）二二〇、三三六、七七四、

八九九、九〇五

『続後撰和歌集』（後嵯峨院↓為家）二〇五、三六八、八一七

『続古今和歌集』（後嵯峨院↓為家他）九五五、一三八〇、一三

八五

『続拾遺和歌集』（亀山院↓為氏）一七四、四六一、八〇六

『新後撰和歌集』（後宇多院↓為世）八二四、八八五

『玉葉和歌集』（伏見院↓為兼）一三三二、一五三〇、一五四〇、

一六一八

『続千載和歌集』（後宇多院↓為世）六一〇

『続後拾遺和歌集』（後醍醐天皇↓為定）一三二八

『隆房』というイメージ

『新千載和歌集』（後光厳天皇↓為定）二二六

『新拾遺和歌集』（後光厳院↓為明）六一九、一〇五七

『新後撰和歌集』（後円融↓為遠）八〇五

『新古今和歌集』（後花園天皇↓雅世）八八四

以上三四首（『新拾遺』六一九と『新後拾遺』は重複。実質は三三

首）

このうち、傍線を付したものは、『隆房集』『艶詞』からの入集歌である。本文異同から推定される撰集資料は、『千載集』から『新勅撰集』までが、『隆房集』、『続後撰集』の歌が、『隆房集』『艶詞』で異同がなく、『続拾遺集』から『玉葉集』までが、『艶詞』である。なお、『新拾遺集』の歌は、『隆房集』『艶詞』いずれとも重ならない。

『続拾遺集』は、弘安元年（一二七八）奏覧、『玉葉集』は正和元年（一一三二）奏覧、翌二年完成となっている。この間、私家集として体裁の整った『隆房集』よりも、物語的性格の強い『艶詞』が撰集資料となっていたことは、注意される。特に、『玉葉集』は、『艶詞』を撰集資料とする勅撰集の中でも、『艶詞』からの入集が最も多く、その詞書が他の勅撰集と比較して、詳細であるなど、『艶詞』享受の様相を垣間見せる。

『続拾遺集』と成立時期の近い『文机談』（文永・弘安の頃の成

立)に、『艶詞』に関する記事があることは、夙に後藤丹治氏の『戦記文学の研究』(筑波書店、一九三六年)に指摘がある。それは次のとおりである。

大納言隆房卿、これも妙首院の御弟子とぞ申める。いみじくいろふかくおはしけるとかや。隆季のあとなれば、笙をも吹給。又風俗・催馬楽ともにうたはせ給。比巴、禅間の御差瓶也。これのみならず、風月の智もをはしけり。和哥などやさしくよませ給。朗詠百首・恋づくし、かやうの物までもいづくにつくりとどめ給めり。(一〇〇頁。傍線引用者)

ここには隆房が、「恋づくし」「つまり『艶詞』の作者であることが記されているが、同時に注目されるのは、隆房を「いみじくいろふかくおはしけるとかや」と評している点である。『文机談』において「大納言隆房卿」は「恋づくし」の「作者」であると同時に「主人公」なのである。

『平家物語』諸本には、隆房が小督への恋に破れるという記事がある。<sup>13)</sup>歌や本文が合致することから、『隆房集』に取材したものであることが明らかにされている。<sup>14)</sup>『隆房集』『艶詞』などには、登場人物名は一切記載されていない。しかし、『玉葉集』成立の頃には、すでに平曲受容が諸記録に確認されていることなどを考慮すると、『平家物語』『小督』の登場人物「隆房」と、『艶詞』の作者「隆

房」とは、イメージとして強い結びつきを与えられたものと考えられるのである。

「隆房卿艶詞絵巻」は鎌倉中期以降の制作であると推定されている。『艶詞』を撰集資料とする勅撰集や、『文机談』などとほぼ同時代であると考えられよう。隆房が生きていた時代からおよそ百年の後、『隆房集』よりも『艶詞』が史料の断片に顔を覗かせる頃、「隆房卿艶詞絵巻」も制作された。そこには、当然のことながら、隆房という人物とは全く乖離した「隆房」というイメージがある。「隆房」というイメージは「恋」と不可分である。それは『文机談』が言う、「いみじくいろふかくおはしける」イメージであると言える。

#### 四、「隆房」享受の諸相

白描物語絵の制作及び享受に、女性の関与があることは、既に指摘されるとおりである。「隆房卿艶詞絵巻」「平家公達草紙」(松永本・博物館本)がいずれも、この白描物語絵に類されること自体、宮廷周辺の、かなり限定された時期・場での享受が想定される。その享受の様相について、見ていきたい。

まずは、はやく角田文衛氏が『平家後抄』(上下、朝日選書、一九八一年)において注目した、北山准后貞子の存在である。藤原貞

子（建久元（一一九六）～乾元元（一一三〇））は、隆房の孫で、鎌倉時代繁栄を見た西園寺家の実氏に嫁し、大宮院・東二条院の母となった。後深草・龜山両帝にとっては祖母に当たり、角田氏の言うように「鎌倉時代のほとんど全部を生き抜いた、世にも稀な貴女」（上、四頁）である。

この北山准後の九十賀は、弘安八年（一一八五）二月三〇日から三月二日にかけて執り行われた。』とはすがたり』巻三には、准后について次の説明記事がある。

かの准后と聞ゆるは、西園寺の太政大臣実氏公の家、大宮院、東一条院御母、一院、新院御祖母、内、春宮御曾祖母なれば、世こそりてもてなしたてまつるも、ことはりなり。俗称は鷺尾の大納言隆房の孫、隆衡の卿の娘なりければ、（略）

（一五七頁）

『増鏡』第一〇「老の波」も、北山准后九十賀に筆を費やしているが、『とはすがたり』の説明記事に該当する記述があり、『とはすがたり』を参考としたものとされている。<sup>①</sup> 以下のものである。

かくののしる人は、安元の御賀に青海波舞ひたりし隆房の大納言の孫なめり。鷺尾の大納言隆衡の女ぞかし。大宮院・東二条院の御母なれば、両院の御祖母、太政大臣の北の方にて、天下みなこのほひならぬ人はなし。いとやんことなかりける御

「隆房」というイメージ

宿世なり。昔、御堂殿の北の方鷹司殿と聞えしにも劣り給はず。

（中、二八九頁）

『増鏡』は、准后を説明するに当たって、「安元の御賀に青海波舞ひたりし隆房の大納言」の孫である、と記している。』とはすがたり』を参考にしながら、独自の記述を付け加えていることになる。

安元御賀に青海波を舞ったのは、実際には平維盛と藤原成宗であるが、『増鏡』は、「御賀に青海波舞ひたりし隆房」という独自文を付加することで、准後の栄華を『とはすがたり』よりも象徴的にする効果を獲得している。『増鏡』が意図的に准後の栄華を強調しているということは、「御堂殿の北の方鷹司殿と聞えしにも劣り給はず」という表現からも窺われよう。『増鏡』において「隆房」とは、そのような効力を持つイメージである。

貞子は、先述のとおり、西園寺家に嫁いだ人物である。前掲書において角田氏は「平家公達草紙」についても触れ、西園寺家との関連を示唆している。また、『竹向きが記』に関する岩佐美代子氏の指摘が想起される。岩佐氏は、『竹向きが記』の一節を「平家公達草紙」松永本第一段の影響にあると指摘し、『平家公達草紙』の影響はめずらしく、この草紙の享受にもからんで興味深い」と述べる。<sup>②</sup> 『竹向きが記』の作者日野資名女は、後伏見・光厳両帝の宮廷に仕え、西園寺公宗と結婚、実俊を儲けている。



「隆房」というイメージの享受には、西園寺家及び貞子の一族、つまり隆房の血脈である四糸家の周辺存在は、やはり看過できないものであると考えられる。

次に、先にも触れた『玉葉集』における『艶詞』からの入集歌を見た。

『玉葉集』に入集した隆房の歌は、四首。うち三首が『艶詞』から採られたもので、一首が『正治初度百首』からの入集である。<sup>24)</sup>

『玉葉集』入集歌は四首とも恋部に記載されているが、『正治初度百首』からの歌は、百首では夏の歌であった。ちなみに、他の勅撰集で『正治初度百首』からの入集歌と考えられるのは、『新勅撰集』三二六(秋下)、『統後撰集』三六八(秋中)、『統拾遺集』一七四(夏)、『新後撰集』八二四(恋一)の以上四首である。これらは、いずれも『正治初度百首』と同じ部立である。『玉葉集』のような変更はない。『玉葉集』は意図的に、これを恋の歌にしているのである。『玉葉集』では、この歌のみ詞書がないが、それは、夏の歌を恋部に入れたためとも考えられよう。

一方、『艶詞』からの入集歌には、詞書があるが、それは次のものである。

おもふこと侍りける比、相坂の関をこゆとて読み侍りける  
いそぎてもかならず人にあふさかのせきにしあらばうれしから

まし

(一三二二)

安元御賀に地久をまひ侍りける中にも、心にかかる事の  
侍りければ

(一五三〇)

せちに覚えける女の人にみまじりて侍りけるをひとずちに  
まもらるるを、人やいかにみるらんとおぼえければ

(一五四〇)

これらの特徴として、まず挙げられるのは、他の勅撰集と比較して詞書が詳細であるという点である。他の勅撰集における『隆房集』『艶詞』からの入集歌の詞書を以下に示す。

女にしのびてかたらふこと侍りけるを、きこゆることの侍りければ、つかはしける  
(千載集・八二七)

女につかはしける  
(新勅撰集・七七四)

題しらず  
(統後撰集・八一七、新拾遺集・一〇五七)

恋の歌の中に  
(統拾遺集・八〇六)

『千載集』以外の詞書を見れば、『玉葉集』の詞書の詳細さが確認されよう。<sup>25)</sup>『玉葉集』がこのように、『艶詞』の歌に筆を費やしていることは、かなり独特の態度である。

更に注目されるのは、一五三〇の詞書である。『艶詞』ではこの歌は次のとおりである。

なにのまひとかやに入りて、はなやかなるふるまひにつけても、あはれ思ふ事なくて、かゝるまじらひをもせば、いかにまめならましとおぼえて、又さしもつらめしくあだなれば、見る事もつゝましく、

ふる袖は涙にぬれてくちにしをいかにたちまふ我みなるら  
ん

ここには、『玉葉集』に見られる「安元御賀」に「地久」を舞ったという具体的記述はない。『艶詞』の詞書から、これがいつのことであったのかを知ることは不可能である。隆房は、「安元御賀」以外にも舞人を務めることが、何度でもあったろうし、これが「安元御賀」である必然性はない。例えば、『玉葉』承安二年（一一七二）四月二七日条には、建春門院平野社御幸の際の舞人の一人として隆房の名が見える。

『玉葉集』がこの歌を「安元御賀」の折のことであるとするのは、隆房が、『安元御賀記』を著した人物である、ということが念頭にあった可能性がある。先述したように、「平家公達草紙」松永本第二段は、『安元御賀記』の抄出である。宮廷に極めて近い場で制作・享受されたとされる白描物語絵に描かれる内容が、『玉葉集』成立

「隆房」というイメージ

の場と全く無縁であるとは、考えにくい。寧ろ、『安元御賀記』のような算賀の記録は、特に近い存在であると考えるのが自然であろうと思われる。隆房が安元御賀に、右舞者（四名のうちの一）として参加していたことは、『安元御賀記』に確認される。また、この算賀については、『玉葉』も詳述する。『玉葉集』詞書が、隆房の舞として「地久」を選択した理由は不明だが、「地久」は四人舞で、御賀第一日目の右方第一番の舞であったことなどが、関連していようか。ちなみに、『玉葉』安元二年（一一七六）三月四日条（御賀第一日目）には、隆房が地久を舞っているのが一目に知られる記事があるので、参考までに挙げておく。

右地久、出レ自二茶屋南一間一、歴一  
右鉦鼓南、「已下舞皆如此」

第一隆房立<sub>レ</sub>東、第二雅賢立<sub>レ</sub>西、

第三時家立<sub>レ</sub>東、第四公時立<sub>レ</sub>西、

進<sub>二</sub>左右胡床中央<sub>一</sub>、舞<sub>レ</sub>之、

「隆房」が「安元御賀」に舞ったという記事は、舞こそ違え、『玉葉集』増鏡』に共通している。『玉葉集』一五三〇には、『安元御賀』に、苦しい恋に悩みながら舞を舞う「隆房」という極めて象徴的な姿が示されていると考えられるのである。

## 五、「隆房」というイメージ

桑原博史氏は「隆房と隆信―平安朝末期の物語愛好の精神にふれつつ―」において、隆房の「業平氣取り」を指摘し、次のように述べている。

一体に、平家全盛の時代は、古代的な貴族文化が最後の余映を  
見せて、一層の光輝をました時代なのであるが、そうした気運、  
ふんい気の中で、隆房も隆信も、それぞれ光源氏あるいは業平  
たらんとこころざしたわけである。<sup>56)</sup>

藤原隆房は、彼自身、自らを物語の主人公に見立て、演出する人物であつたようである。その隆房が、『隆房集』のよつな、恋の懊惱を綴つた歌集を著したことに、松尾葦江氏は次のように述べる。

隆房の側からいえば、隆房集の創作は「恋する男」としての営為の一環でもあり、自らをそのよつなイメージの糖衣にくるみこんでゆく手段でもあつたのだらう。<sup>57)</sup>

隆房が自ら醸そつとしたこのイメージは、彼が生きていた時代からおよそ百年の後、すなわち絵巻化された時点では、「隆房」を象徴する共通認識のよつなものであると言えよう。絵巻化という事実が、「隆房」がつくられたイメージであることを、目に見える形で

示している。そこには、当然のことではあるが、享受者が望むイメージが付与されている。「隆房」は「恋」と不可分なイメージであつた。白描物語絵に描かれた「隆房」とは、同時代的に愛好されたイメージだったのであろう。

「平家公達草紙」松永本は、その「隆房」が語り手として、鑑賞者の眼前に繰り広げる「平家公達」の世界である。平家の公達は、優雅に、華やかに、絵巻の中を立ち回る。その姿は、「いみじくいるふかくおはしける」「隆房」というイメージによって榨取られている。

「平家公達草紙」松永本第二段には、青海波を舞つ維盛が描かれている。

山の端近き入日のかげに御前の庭の砂子ども白くきよげなる上に、花の白雪空に知られて散りまがふ程、物の音もてはやされたるに、青海波の花やかに舞ひ出でたるさま、惟盛朝臣の足踏み袖振る程、世のけいき、入日のかげにもてはやされたるかたち、似る物なくきよらなり。  
(一六六頁)

この段の絵は、維盛と成宗が青海波を舞っている図である。白描物語絵の鑑賞者は、「隆房」という「語り手」を媒体として、光源氏を髣髴させるその姿を享受するのである。それは、現実に行われた、物語の世界である。実際に行われた安元御賀を、具現化された

『源氏物語』の世界として捉えようとする眼差しがそこにはある。維盛も実際に光源氏に比された人物である。しかし、一面でそれはやはり白猫物語絵の享受層が欲した、「平家公達」の姿でもある。

『源氏物語』、『伊勢物語』などの世界は、「隆房」の時代、つまり平家文化の時代に、実践された。平家文化の時代はそのような、憧れの世界を具現化する力を持っていたのである。鎌倉中期から南北朝にかけての宮廷、すなわち白猫物語絵の時代は、その平家文化の時代を、「平家公達草紙」、「隆房御詠詞絵巻」などに絵巻化して、享受した。それは事実には仮託した虚構である。そのような時代の様相は、平家文化そのものの時代とは異なったものとして、検討の必要性もあるかと思われるのである。

### 注

- ① 『続群書類従 補遺二 看聞御記(下)』、続群書類従完成会、一九三一年。
- ② 『明月記』、国書刊行会、一九七一年。
- ③ 白猫物語絵については、以下を参照した。  
真保亨氏編、『白猫絵巻』、日本の美術、第四八号、一九七一年五月。  
白畑よし氏編、『物語絵巻』、日本の美術、第四九号、一九七一年六月。  
『特別展 白猫絵 図録』、和泉市久保惣記念美術館、一九九二年。  
秋山光和氏、『白猫物語絵の流行』、『日本絵巻物の研究 上』、中央公論美術出版社、二一年、四頁。

「隆房」というイメージ

④ 「平家公達草紙」書誌事項(兵藤裕己氏「平家公達草紙」体系物語文学史 第五巻、有精堂、一九九一年、参照)  
松永本(南北朝頃の制作と推定される)

所蔵 福岡市立美術館松永コレクション

形態 縦一六・一cm、全長六一五・四cm、一巻、詞五段、絵四図

題名 なし

奥書 なし

箱書 平家公達草紙(近世のものとして推定される)

博物館本(天保三年狩野養信写)

所蔵 東京国立博物館

形態 縦約二六・一cm、全長約一〇四一・四cm、一巻、詞六段、絵九

### 図

題名 なし

奥書 卷之名不伝なし画者土佐光信女筆と申伝之由右一巻つつしあし

けれと光正之風なるへしと内記廣尚鑑定之由今住吉家の本をえ

て天保三年卯月十三日法眼養信うつす

書陵部本(鎌倉末から南北朝頃の制作と推定される。)

所蔵 宮内庁書陵部

形態 縦二四・二cm、全長三七八・二cm、一巻、詞三段、絵なし

題名 なし 書陵部備付の目録に「佚名草紙」とされるもの

奥書 なし

⑤ 田中一松氏「平家公達草紙について」(『国華』第六六五号、第六六六号、一九四七年七月・八月)に指摘され、以後これらの相違点などについて、本位田重美氏「平家公達草紙」の詞草について」(『人文論究』第一三巻二号、一九六二年八月)、古代和歌論考」笠間書院、一九七七年所収)、桑原博史氏「隆房の作品」(『中世物語の基礎的研究 資料と史

的考察。風間書房、一九六九年）などに詳細な研究がある。

また、中野幸一氏『平家公達草紙』をめぐって（『軍記物とその周辺』、一九六九年三月）、物語文学論攷、教育出版センター、一九七一年所収）は、三種の伝本を一連のものとして、平家公達のエピソード集として編集されたものと見る。

⑥ 『平家公達草紙』体系物語文学史 第五巻、有精堂、一九九一年、一〇六頁。

⑦ 田中氏に同じ。詞はそれよりさかのぼることが可能であり、恐らくは鎌倉末期までに述作された物語と見て差支へあるまい。（第六六五号、二八四頁。）

⑧ 隆房が作者ではないか、という議論は、中村義雄氏『平家公達草紙と藤原隆房—青海波の段の出現を中心として—』（『美術研究』第二二五号、一九六一年三月）によって提起された。中村氏は、松永本第二段が『安元御賀記』の抄出であることを指摘。『建礼門院右京大夫集』などととも全体を通じて雰囲気似ていることなどから、隆房作者説を提起した。

この問題は、『安元御賀記』諸本論との関連から、更に詳細な検討が必要とされている。

⑨ ⑥に同じ。一〇五頁。

⑩ 中野幸一氏『書陵部蔵の佚名物語一巻について—平家公達草紙の残欠か—』（『国語と国文学』第四〇巻三号、一九六三年三月）、『物語文学論攷』所収、三二五頁。）、さて、このような形態・内容をもつ本巻は一体何であろうか。（略）多少の脱文はあるとしてもわずかず一六行の本巻が二話三段に分かれていること、物語としては叙述が概説的であること、形態が卷子本であることなどから推して、本巻はまず物語絵巻の詞書ではないかと考えられる。

⑪ 『安元御賀記』諸本は大別して二系統に分類される。各、定家本系と

群書類従本と名称される。定家本は、本文が簡略で、平家一門に関する記事が殆どない。一方、群書類従本は、平家一門を賞賛する記事を有す。松永本第二段に見られる維盛の青海波が素晴らしいという記述も、群書類従本にはしか見られないものである。これらについて、以下の研究がある。

久保田淳氏『平家文化の中の源氏物語—安元御賀記』と、高倉院昇霞記—』（『文学』第五〇巻七号、一九八二年七月）

伊井春樹氏『安元御賀記』の成立—定家本から類従本—、平家公達草紙、へ—』（『国語国文』第六一号、一九九二年一月）

春日井京子氏『安元御賀記』と、平家公達草紙—記録から平家の物語—へ—』（『伝承文学研究』第四五号、一九九六年四月）

以上に鑑みて、『安元御賀記』諸本と松永本第二段の関係は、定家本、安元御賀記。↓群書類従本、安元御賀記。↓松永本第二段であると想定される。しかも、その制作年代が下ることが指摘され、隆房が作者であるかどうかという議論にさらなる疑問を投げかけた。

⑫ ⑧に同じ。

⑬ 久保田淳氏『古典文学史概説 中古』、別冊国文学 古典文学史必携、第四三号、学燈社、一九九二年、三〇頁。

⑭ 『隆房卿艶詞絵巻』書誌事項（秋山光和氏『隆房卿艶詞絵巻』の内容と表現』（『日本絵巻物の研究』下、中央公論美術出版、二〇〇〇年、参照）

所蔵 国立歴史民族博物館

形態 縦二五・五cm、全長六八四・九cm、一巻、詞書長歌一首反歌三首、絵四図

題名 なし。極札（縦二一・七cm、幅二一・八cm）に、「源氏あし手畫卷 土佐光正筆」とあり。

奥書 なし

箱書 内箱表「土佐光正源氏草紙巻」、外箱表「源氏繪巻物残缺士佐光正筆」真「昭和四年 觀瀾孝誌」との蔵者、益田孝の識語がある。

「隆房脚艶詞繪巻」という名称が文化財指定名称となったのは、昭和三十八年のことである。書誌に見えたとおり、題名はない。極札などが示すように、「源氏物語」に関する繪巻であると目されていたらしい。

⑮ 「隆房脚艶詞繪巻」の繪詞について、『日本繪巻大成10 葉月物語繪巻 枕草子繪詞 隆房脚艶詞繪巻』中央公論社、一九七八年、一三六頁。

⑯ 「隆房集」解説、『今物語・隆房集・東齋隨筆』三弥井書店、一九七九、四頁。

⑰ 「隆房集と艶詞―隆房集29〜44の改変―」『日本文学』第四七卷九号、一九九八年九月、六九頁。

⑱ 参照した『平家物語』における小督隆房譚の掲載位置は、以下の通り。寛一本系、巻六相当に位置するものは、源平盛衰記「井卷第二五、小督局事」、延慶本「第二本、小督局内裏へ被召事」、屋代本のみ「卷第三、小督局事」と、位置が異なる。

⑲ 池田誠氏「平家物語」「小督」隆房譚考、『文芸と批評』第六卷八号、一九八八年一〇月。

⑳ 『歌苑連署事書』（正和四年 一三二五）、「花園院宸記」元亨元年（一三三二）四月など。（参考、『国語国文学研究史大成9 平家物語』三省堂、一九六〇年）

㉑ 井上宗雄氏「増鏡」中、講談社学術文庫、一九八三年、三〇一頁。

㉒ 岩佐美代子氏「竹むきが記」読解考、『宮廷女流文学読解考』中世編、笠間書院、一九九九年、四一四頁。

㉓ 「くれをまつおもひはたれもあるものをぼたるばかりや身にあまるべ

き」『正治初度百首』は、『新編国歌大観 第四巻』によった。

㉔ 「千載集」八二七の歌は、『隆房集』『艶詞』とも合致する部分はあるのだが、撰集資料ではないと考えられる。その歌は次のものである。

いづくよりふきくるかぜのちらしけんたれもしのぶのもりのことのは  
は

『隆房集』該当歌は以下。

さしもしのべども、いかでか漏りにけむ、「人の聞きてける」とてあながちに歎くも、ことわりにて

おぼつかないかなる風の散りにけんたれもしのぶの森のことは  
以上のように、下の句のみが一致する。これに対して全体的に一致する歌が、『月詔和歌集』五六一（『新編国歌大観 第二巻』）である。  
女をしのびてかたらひ侍りけるが、風聞したりければつかはしける

いづくより吹きくる風のちらしけんたれもしのぶの杜のことは  
詞書もよく似ており、この歌は、『月詔和歌集』から入集であると考えられる。ただ、詞書の内容は、いずれも同じであり、『隆房集』と

『月詔集』は同主題の推敲の段階の差を示すものと考えられる。

㉕ 『平安文学研究』第三〇輯、一九六三年六月、一六一頁。

㉖ 「恋する隆房」『三國伝記（上）』付録、一九七六年、四頁。

㉗ 岩波文庫『建礼門院右京大夫集』は参考として以下を挙げる。「入り方の日影さやかにさしたるに、楽の声まさり、もののおもしろきほどに、同じ舞の足踏み面持、世に見えぬさまなり。詠などしたまへるは、これや仏の御聲陵頻伽の声ならむと聞ゆ。おもしろくあはれなるに、みかど涙をのこひたまひ、上達部御子たちも、みな泣きたまひぬ」（源氏物語・紅葉賀）

（岩波文庫、一六六頁脚注）

㉘ 『建礼門院右京大夫集』「法住寺殿の御賀に、青海波舞ひてのをりなど

は、光源氏のためしも思ひいでらるゝなどこそ、人ぐいひしか。(「岩波文庫、一〇〇頁)

【引用・参照本文一覧】

『平家公達草紙』

(本文) 『建礼門院右京大夫集』 岩波文庫、一九七八年。

(絵) 松永本 、『特別展 東洋美術1000年の軌跡—福岡市美術館—松永コレクション』(『黒田資料』の名宝を中心に—図録、大和文華館、一九九七年。

一九九七年。

博物館本 、『東京国立博物館蔵「平家公達草紙 吉巻」(89、五四—三

一) 紙焼写真。

『隆房卿艶詞絵巻』 、『日本絵巻大成10 葉月物語絵巻 枕草子絵詞

隆房卿艶詞絵巻。中央公論社、一九七八年。

『安元御賀記』

定家本 、『徳川黎明会叢書 古筆聚成 古筆手鑑篇五』 思文閣出版、

一九九四年。

群書類従本 、『群書類従 第二九輯 雑部 群書類従完成会、一九一八年。

『隆房集』 、『今物語・隆房集・東齋隨筆』 三弥井書店、一九七九年。

『艶詞』 、『新校群書類従 第二二巻 雑部三』 内外書籍、一九一〇年。

『建礼門院右京大夫集』 、『建礼門院右京大夫集』 岩波文庫、一九七八年。

『文机談』 、『校注 文机談 笠間書院、一九八九年。

『とほすがたり』 、『新日本古典文学大系 とほすがたり たまきはる』

岩波書店、一九九四年。

『増鏡』 、『増鏡—全三巻』 講談社学術文庫、一九八三年。

『竹向きが記』 、『新日本古典文学大系 中世日記紀行集』 岩波書店、一

九九〇年。

『源氏物語』 、『新潮日本古典集成 源氏物語—全八巻』 新潮社、一九七

六—一九八五年。

『平家物語』 諸本としては、以下の四本を参照した。

覚一本系 、『新日本古典文学大系 平家物語上下』 岩波書店、一九九

一・一九九三年。

延慶本 、『延慶本平家物語 本文編上下』 勉誠社、一九九〇年。

屋代本 、『屋代本高野本対照 平家物語—全三巻』 桜楓社、一九九〇

—一九九三年。

源平盛衰記 、『源平盛衰記』 国民文庫刊行会、一九一〇年。

『玉葉』 、『玉葉—全三巻』 名著刊行会、一九九三年。

(付記) 本稿は、同志社大学国文学会(二一年六月)および関西軍記物語研究会第四三回例会において口頭発表したものを再考し、まとめたものである。席上、多くの貴重なご教示を賜りましたことを深く御礼申し上げます。